

P0のメカニズムとわたくし

97年にP0が発表されたとき、その精巧なメカニズムに畏敬の念を覚えると同時に、「何もここまで」と感じた人も多かったのではないだろうか。私も実はその一人である。開発者の絶対読み取り精度へのこだわりは理解できる。理想が実現したときにもたらされるであろう美の世界は、なんとなく予想できた。だがあの黒い金属の固まり、そしてあの価格。さらにオーディオ誌が伝える、耳障りなメカニズムの駆動音。やっぱりね、あの駆動機構が静寂であるはずがない。なぜそう思ったか話そう。

私は83年から86年まで半導体関係の会社に勤務していた。半導体というのは微細加工技術の集積だ。回路基板に半田付けされている黒いICやLSIの中身をみたことがあるだろうか。樹脂モールドを丁寧に壊すと、中から数ミリ角以下のシリコンチップが現れる。ほとんどの場合、回路基板と接しているリード(足)とそのチップとの間は、数十ミクロンの金、アルミニウム、銅などの細いワイヤーで結線されているのを見ることができよう。この結線を行う装置をワイヤーボンダーという。テレビのニューズなどで、まるでミシンで刺繍をするようにワイヤーを配線している映像をごらんに

なつたことがあると思う。私はワイヤーボンダーの保守サービスの仕事で、全国を飛び回っていたのだ。

シリコンチップ上の100ミクロン角以下の面積しか持たない電極とリードの間1ミリ程度の距離を、マイクロプロセッサで制御し毎秒10本程度の早さで接続していく。わずか1ミリのワイヤーを接続するための装置は、冷蔵庫並の大きさになり、重量は100キロを越える。

ワイヤーボンダーの駆動機構は、P0と同じ原理なのだ。当時のワイヤーボンダーは8ビットのマイクロプロセッサでDCサーボモーターを三軸同時制御していた。メカニズムはP0と同じボールベアリングを使って位置決め精度を確保していた。

でも数キロはある可動部分を毎秒10回も、ミクロン単位の精度で動かし続けるのは大変なことだ。DCサーボモーターとボールベアリングの間のカップリングの取り付けがちよつと悪いだけで、精度がない。可動部分を支えるスラストボールベアリングのグリスが多くても少なくてもいけない。メカニズムの調整を十分にいい、DAコンバータの出力波形をシンクロスコープで観察しながら、オーバーシュートがでないようにサーボゲイン調整のトリマーを微妙に動かす。安定稼働させるために、何回徹夜を強いられたことだろう。あれから20年経つのに、今

でも夢に見ることがある。

バージョンアップキット付きのP0sが届いて、初めて電源を入れて、レーザピックアップの駆動音を聞いたとき、ずいぶん静かだなと思った。もつと大きな音がするのかと思った。でもディスクを入れた後のキュンキュンという音は、ワイヤーボンダーと同じだった。

P0は量産品ではないから、多分工員さんが一台ずつ手作業で組み立てているのだろうと思う。デジタルオーディオ機器だから、回路基板の特徴に目を奪われがちだが、モーター、カップリング、ボールベアリングを正確に一直線に取り付け、適正な均一負荷でピックアップが移動するようにグラムゲージをあてる人が、私のP0sも大事に組立ててくれたのではないだろうか。

優秀な電子制御回路は、アナログなメカニズムの世界で生じてしまう誤差を吸収する。だがその範囲には限界がある。アナログ部分がしっかりしていなければ、デジタル部分が如何に優れているとしても、本来の性能を発揮することはできない。グリスで両手をべとべとにして、いつもひっかき傷だらけだったあの頃のことを思い出した。P0から中途半端な音が出る訳がないじゃないか。

私はそう思っていたし、現実にそうだった。心から嬉しかった。

P0に乾杯

コンピュータの世界では「ユビキタス」という言葉が流行になりつつある。携帯電話やPDAを使って、どこにいてもインターネットに接続して情報を交換することができるようになってきている。これからはいろいろなところにコンピュータが組み込まれるらしい。歯にマイクロチップを埋め込んで、骨伝動で音楽を聞くこともできるようになるとか。

音楽の世界では、ユビキタスは20年前から常識になった。屋内から音楽を陽光のもとに連れ出したウォークマンの功績は偉大だと思う。私も何台かのウォークマンを使い潰した。そして時代が変わり、MDがカセットテープを駆逐し、MP3プレイヤーでポケットに数時間分の音楽を持ち歩くことができる時代になったが、不思議とそれらを持ちたいという気持ちが起らない。

電車で偶然隣り合わせた青年が、インナーイヤースピーカーから盛大な音漏れを起こしている。大股を開いた彼は、どうやら熟睡しているらしい。彼は本当に音楽を聴いたと言えるのだろうか。

目覚めた彼は、こう問い返すかもしれない。高価なシステムの音がそれほど違うと、本当に聞き分けることができる耳があるのか。ケーブルを換えて音が変わっ

たと一喜一憂しているだけで、本当に音楽を楽しんでいるのか。

H・A・L・会員の方で、そういう疑惑に襲われたことがない人は幸いであると思う。川又さんからP O sの再生産を告げるメール(No.400)をもらったときから、私は大いに悩むことになった。

V U K I P O 搭載のP O sは、よほどの思い入れがなければ即決できない高額商品だ。川又さんのメールが流れてわずか二時間、三名の方が即決のメールを出されたが、確かな耳と一途な思いを持たれていることに羨望した。

私も欲しいと思った。P O sの性能は雑誌で読んで知っている。その音も、川又さんの試聴室で少しだけ聞かせていただいたことがある。でも川又さんの試聴室のリファレンスは、自分のシステムとは格が違う。自分のシステムにP O sを同居させたとしたら、本来の能力を十分に引き出すことができるのだろうか。H・A・L・会員の方々から寄せられる素晴らしいレポートを読むにつけ、自分には音の違いを聞き分ける耳がないのではないかと感じていたので、P O sは過剰投資だと言いつけた。念のために、性能は抜群だけだとデザインがごついから、リビングに置きたくないぞと付け足した。

ところが今こうしてコンクールの原稿

を書いているのだから、いろいろなことがあったのである。ともかくP O sは我が家にやって来た。

M DやM P 3で音楽を聞くことを部屋着でくつろいでいる感覚に例えるならば、P O sで音楽を聴くことはスーツで正装して出かける感覚といえよいのだろうか。

居住まいを正して音楽に正対するという心地よい緊張感。昨日までの再生音がポラロイド写真だとしたら、P O sが描く世界は慎重に撮影された大判のポジをルーペで見たように繊細で、微粒子まで鮮明だ。

タクトが振り上げられシンフォニーが始まる瞬間の張りつめた気が、静寂によって伝わる。ドラムスのシンバルは、眩い光が砕け散るように華やかだ。女性ボーカルの中には天使が潜んでいて、超絶の技巧には神が宿る。天与の才能のすべてを昇華してあやなされる、至高の芸術。ああ、彼らは私よりも遥かに神に近い。

私にもわかる異次元の音、これほどの音の変化をかつて知らない。音の入り口をしっかりとしたものには換えることに、これほどの意味があったのか。これはまさしく一生モノに違いない。川又さんはやはり正しかった。

十代の頃は、どんな立派なステレオセットよりも、自分の感性を磨くことが重要で、例えばジカセから流れてくる音楽でも、そこに魂を感じることができれば、素晴らしい感動の世界に出会うことができると思っていた。

いつしか時は流れ、心は日々の重圧にややもすると挫けそうになり、柔軟であったはずの心は堅い鎧をまとってしまっただらしい。残念ながら、鎧を脱ぎ捨ててしまえば、この荒々しい時代に一日とて生きていくことは難しいだろう。

オーディオの先輩にいわれたことがある。どんな音で鳴っている音楽にも、若い時は感動することができる。それは心のアンブレで音楽を聞いているからだ。年齢を重ねてくると、あの日に聞いた音は、こんなものではなかったはずだと思うようになる。それは自分の心がかたくなになってきたことの表われなのだが、もう一度あの時の感動に出会いたい一心で、高価なシステムを揃えてしまおうのだ。

その通りだと思うようになった。P O sが我が家にやって来て、昔のC Dを聞き直していると、今まで気づかなかった音が聞こえてきたり、作り手の意図が理解できるような音に出会えたりする。気持ち若返ったような感じだ。これは

一番の「P O s効果」だ。気にしたことになかったテープノイズが耳についてしまうのにはちよつと苦笑するが。

P O sは自分の心の奥深くにあるものと、音楽をつなぐための掛け橋になってくれるらしい。20年後、私はもう定年を迎えて現役を引退しているだろう。その時までP O sも元気で動いていて欲しい。懐かしいメカニズムの音を聞きながら、若い日の自分に戻って至福の瞬間を訪れるのを待つのだ。奏でられる音楽に、自分が確かに生きてきたことを重ねながら、2002年醸造の特上ワインで乾杯をしようではないか。人生に、音楽の喜びを授けてくれた人々に感謝をこめて。